

## 第 1 章

### 序論

## 第1章 序論

---

### 1-1 研究の背景

#### 1-1-1 研究の視座

20世紀後半以降の開発による環境破壊は、人間の存在（そして活動）と環境の間に無視することのできない不適合を発生させた。このような事態に対し、近年、環境の修復や保全・管理のための政策が推進されてきた。しかし、未だ明確な方向性は示されていない。そればかりか、従来の政策ではその大半が達成されず、依然として不適合感が持続している状態にある。この原因として、国やその土地などによって、環境保全の概念や、環境に対する意見が異なることが考えられる。この状況を『共生のフォークロア』の著者野本は「これら環境問題（自然環境問題）への対応は、当然のことながら、即物的・自然科学的な対応が中心となり人の心意気に関わる面は遅れがちになる。その上、環境問題に関する心意的対応は、高みから発せられる傍観者的・教訓者的発言か、あるいは、悲観的嗟嘆にとどまることが多い<sup>1)</sup>」と述べている。

また、都市内では近代化の課程で、技術力と経済力による大規模開発によって人間と自然との共生バランスや環境システムは崩れている。例えば「ごちゃごちゃ」した「盛り場」と呼ばれるような活気ある界隈までも、区画整理の対象となり都市環境は大きく変容している。つまり、人間-環境系が、自然環境において、また都市環境において希薄化してしまっただのである<sup>2)</sup>。

そのような状況の中で、地域環境の再生という言葉をしばしば聞くようになった。焦点とされているのは「破壊」の跡の「再生」である。このコンテキストには、「1.公害都市の環境再生」、「2.環境保存的な『発展』の方途」、そしてこの1、2と密接に関連している「3.地域環境再生のためのオ-ルタナティブ(alternative)な手法としての手法、仕掛け、制度づくり、理念をどう構築するか」という三つの課題があるされている<sup>3)</sup>。これら3つの課題の中でも、とりわけ、3つ目の「オールタナティブな手法」が地域環境の再生という命題上のものではなく、全ての環境問題において、必要なものとなってきているように考える。

では、これまでの手法に取って代わる手法に、何が必要なのだろうか。近藤は「人間と環境との相互作用の中で得られる環境との上手なかかわり方を可能とする能力」としての「環境的スキル(environmental skill)」<sup>4)</sup>の必要性をあげている。また鳥越は日本民俗学の祖「柳田国男」の環境観を例にあげて、環境民俗学の視点により、以下のように述べている。

「柳田の環境論は西洋の論理からみれば、自然の中にたましいを視て人間と自然とを一体化するという点から、東洋的と表されると思う。だが別に東洋的である必要はないのであって、この中に「現代的にリフォームして使用できる知恵が内包されていればよい」のではなかろうか<sup>5)</sup>」

つまり、これは伝統的社会に存在した「民俗の智」ともいべき物への視線である。「人が

暮らしや生業の中で環境といかに関わってきたかをより多角的・有機的に、より詳細に学んでゆこう」<sup>6)</sup>という姿勢が、いま、一つの方法として必要とされるのである。

### 1-1-2 関係性の掘り起こし

鳥越の言う「現代的にリフォームして使用できる知恵を内包されていればよい」とした環境と人間の関係性は、そこに潜むシステムを見つけ出して、掘り起こし、一つの方法として現代に再利用してやることを指している。

近年、混沌、有機的といった表現がなされるアジア都市は、独自の環境観に基づいた、陰陽や風水に代表されるコスモロジー<sup>7)</sup>による、エコロジーの思想が環境文化として内在していた。その一部が、水との関わりであり、「かつて日本やアジアの各地域では、欧米よりずっと水が人々の暮らしに結びつき、生活文化を形づくっていた。その文化の掘り起こしがいま、求められている。」<sup>8)</sup>とあるように、自然の中でも特に水環境との共生はアジア都市の重要な個性と位置付けることができる。さらに、陣内によるアジア都市の特徴は「アジア都市においては、自然要素の中でも、『水』への親近感を強く示す。宗教上の祭礼や儀式がしばしば都市空間の水と密接に結びつくものも、アジアの特徴である」<sup>9)</sup>とされている。つまり、アジアの都市が内包する水と人との関係を、宗教をというフィルタ - を通して、掘り起こすことは、すなわち、鳥越の言う「現代へのリフォーム」を行うことの第一段階に他ならない。

### 1-1-3 掘り起こしの対象として

日本では多くの交通が、陸にとって代われ、経済が右肩上がりの成長を続けていた頃、都市において水路は無用なものとされ、埋め立てなどによって多くが姿を消した。そして都市は大きく姿を変えてしまった<sup>10)</sup>。このような都市は日本各地に多くあり、そのカウンターとして近年、水辺の重要性が叫ばれるようになった。最近では低調になったとはいえ Water - front 論の関心もその表れである。逆説的にみれば、このことは水とのかかわりをもった都市が、日本に多く存在していたとことの表れである。

同様に、先にも述べたような背景のもと、水（辺）と関係の深いアジア都市は、枚挙に暇がないほど存在する。日本と同じように、姿を変えてしまった都市や、そうではない都市様々であるが、その代表は水路が網の目のように発達したその姿から上田<sup>11)</sup>によって「水網都市」と定義された都市を挙げることができる。古くから“水網都城”とよばれた中国の「蘇州」や、淀川を中心に運河のネットワークが張り巡らされ、江戸時代には“八百八橋”と謳われた「大阪」などである。これらの都市には水が都市の奥まで入り込んでおり、生活文化や、産業の発展を促がす重要な役目を果たしていた。つまり水と都市を結びつけたものは、産業であり、その中から住民の生活文化が形成されたと言える。

一方、水と都市を結びつけているものが「宗教」だとされる都市がある。ヒンドゥー教の都市には古来、理想都市の思想があり、その中の選地理由として、「川の合流点や涸れる

ことのない湖、池、貯水池の岸边にあって陸路と水路を兼ね備えている」<sup>12)</sup>こととされている。このような思想を持つヒンドゥー教の都市において、メッカやエルサレムに例えられ、ヒンドゥー教の聖地の一つにして最大の聖地である「ヴァラナシ (Varanasi)」は水との関係性がとりわけ特徴的である。ヴァラナシを代表する光景として有名な、沐浴をする信者達の姿があげられる。そして沐浴のために建造されたといつてよい、宗教的空間を信者に提供する河岸空間「ガート (Ghat)」を要するヴァラナシは世界にも例を見ない都市と言えることができよう。また、ヴァラナシは生きる為の都市であると同時に、死に臨むための「臨死都市」という顔を持ち合わせている。常にヴァラナシはヒンドゥー教の聖地として、「聖と俗」、「生と死」という二つの顔を持つのである。

このような特徴を持つ聖都ヴァラナシを、本研究では冒頭の視座において述べた「民俗の智」を掘り起こし、リフォームすべく対象として適していると考え、対象とすることとした。つまり、アジア都市が「内包する水と人との関係」を、宗教をというフィルタ - を通して見る事が、可能な都市だと考えられる。

## 1-2 研究の目的、及び構成

### 1-2-1 本研究の目的

本研究では、ヴァラナシの Dev Diwali 祭を一つのケーススタディとして取り上げ、祭という非日常的な時間に着目する。そこから環境保全の概念や、環境に対する意識を掘り起こすための対象として環境と人間を結びつける役割を果たすもの、「現代にリフォーム」するために意味付けの拡張がされたものを明らかにする。そしてその中に存在するであろう環境と人間の関係性についての構造を明らかにすることが目的である。

その前段階として、日常生活での河岸空間 コミュニティ (人間 環境系) の関係性を明確にし、非日常 = 祭が及ぼす影響についても明らかにする。

つまり、今後の環境計画に「刷り込む」という、「現代的にリフォーム」するための方法を現地でのヒアリング中心とした調査により、聖都ヴァラナシの中から模索することが目的である。

### 1-2-2 既往の研究

ヴァラナシを扱った文献は多く存在するが、冒頭に述べた視座より、ヴァラナシを扱っている既往の研究は日本においてほとんどない。河岸空間「ガート」の機能と形態について扱った論文としては、法政大学大学院工学研究科の弘中<sup>13)</sup>による研究が挙げられるが、一般的紹介と解説にとどまっている。そこからより踏み込んで、都市と河岸空間「ガート」の関係性を扱っている論文としては、京都大学大学院工学研究科の柳沢<sup>14)</sup>による、都市空間の構成ならび、それを成立させている一要因として宗教的要因を位置付け、調査分析を行った研究が唯一挙げられる。本研究のため行った一年目の調査は、柳沢氏と共同で行っており、その研究や方法から、また本人より、多くの刺激と示唆を与えられている。

### 1-2-3 論文の構成

本研究を明らかにするためのプロセスとして、下記のように論文構成を行った。本論文は、結論を含めて5章から構成されており、各章における研究の目的、及び方法は以下の通りである。

第2章では、研究対象について、まずは概要を述べる。ここでは、ヴァラナシの聖地性について先ず、都市の呼称、歴史についてまとめた。そして「ガート (ghat)」と呼ばれるヴァラナシにおける河岸空間、「モハッラ (mohalla)」と呼ばれるコミュニティについてそれぞれ、概要をまとめた。

第3章ではヴァラナシの社会構造に視点から「日常の関係性」について述べる。ここでは主にヒアリング調査を基にし、聖地ヴァラナシにおける日常生活上の人々が河岸空間に対してとる「当たり前」の行動を分析する。そして周辺コミュニティ・河岸空間・河川の間にある「日常の関係性」について考察を行った。

第4章ではDev Diwali 祭の詳細を先ず述べる。次に非日常 = 祭のヴァラナシの社会構造から祭の構造として、「伝統的仕掛け」、「現代的仕掛け」についてそれぞれヒアリングデータを基に分析、考察を行う。そして、この二つの「仕掛け」の相関から祭全体の構造を明らかにする。

第5章では本研究の結論として総括する。本研究で得られた結果、Dev Diwali 祭のもつ構造の可能性、課題についてそれぞれ述べる。

---

## 第1章 引用文献、及び補注

- 1) 野本寛一：共生のフォークロア 民俗の環境思想，p10，青土社（1994）
- 2) 説田寿：「ホスト」の成長過程とサポートシステムに関する研究 「南紀熊野体験博」体験リーダーを対象として，滋賀県立大学大学院環境科学研究科修士論文(2000)
- 3) 長谷川公一：特集 地域環境再生の社会学，環境社会学研究，5，p4，環境社会学会(1999)
- 4) 近藤隆二郎：環境イメージの発達過程にける役割行為の意義と効果に関する研究，p22，大阪大学大学院工学研究科博士課程学位論文（1994）
- 5) 鳥越皓之編：試みとしての環境民俗学 琵琶湖のフィールドから，p31，雄山閣出版（1993）
- 6) 野本：前掲書，p343
- 7) スマート・ジウムサイ：水の神ナーガ アジアの水辺空間と文化，鹿島出版社（1922）
- 8) 陣内秀信編：中国の水郷都市，p5、鹿島出版会（1993）
- 9) 陣内秀信：アジア都市理解のための着眼点，季刊 iichico winter，38，p4，日本ベリエールアートセンター（1996）
- 10) 上田篤・世界都市研究会：水辺と都市 空っぽの復権，学芸出版社（1986）
- 11) 上田：前掲書，p7
- 12) 都市史図集編集委員会編：都市史図集，p66，211，彰国社（1999）
- 13) 弘中誠二：聖都ワーラーナシーに関する研究 - 都市・住宅・祝祭の空間構造 - ，法政大学大学院工学研究科（1995）
- 14) 柳沢究：ヴァラナシ（インド）の都市空間構成原理に関する研究，京都大学大学院工学研究科修士論文（1995）